

マネジメント機能付きレンタル工場 ベトナムの国家プロジェクトに参画 90年代半ばにチャイナ+ワンを実践

ユニカホールディングス ― 安見 義矩社長

ビルやトンネルの壁、道路などに穴をあけるドリルやホールソーなどのメーカーであるユニカ(ユニカホールディングスは純粋持株会社)は、20年ほど前の1990年代半ばに中国とベトナムに進出し、いち早く国際的な生産・販売のネットワークを築いている。しかもベトナムでは、自社製品を製造する一方、従業員の採用から総務・経理、さらには生産まで代行することで、日本の中小製造業の進出を支援するレンタル工場を運営。この工場の実績がホーチミン市に認められ、昨年末には国営企業の子会社と共同して、日本の中小企業専用のマネジメント機能付きレンタル工場を新設するなど、日本とベトナムとの交流促進にも貢献。安見義矩社長は「今後は欧米やアフリカにも拠点を開設したい」と文字通り、ユニバーサルでユニークなカンパニーとして、一層の飛躍を期している。(ジャーナリスト/松浦 利幸)

■管理者1人と機械を持ってくれば操業可能

「昨年12月に完成したピーバン・テクノパーク社のレンタル工場は、日本の中小製造業をホーチミン市を中心とするベトナム南部に誘致し、裾野産業を発展させたいというベトナム政府の国家プロジェクトの一環。それだけ、当社のこれまでのレンタル工場の成果が評価されたということで、これからも日本とベトナムとの架け橋の役割を担っていきたい」―東京都心の千代田区にあるユニカホールディングス(HD)の本社で、安見社長は穏やかな笑顔を見せながらも力を込める。

この新しいレンタル工場はホーチミン市にあり、市の中心部から15km(キロメートル)と交通の便に恵まれているうえ、5万4000トンの貨物船が運航できるソアイラップ川に面するヒエップフォック工業団地の中にある。実際に筆者も訪れたが、建設された工場は、床面積が1000㎡と500㎡がそれぞれ4つ、330㎡と250㎡が同2つに区分けされ、ベトナムに進出したい企業は「管理者が1人駐在し、機械を持ってくるだけで操業できる」(同テクノパークの藁谷力=わらや つとむジェネラルディレクター=現地責任者)。

どうしてそのようなことが可能かといえば、同テクノパークが、進出する企業の従業員の募集や経理、政府への申請、事務用品の調達、食事の手配などの間接業務を代行するとともに、同テクノパークの製造部門として創業。事業が軌道に乗った段階で現地法人化するというサポート体制を整えているからだ。

ユニカHDは、このピーバン・テクノパークを、国営企業の子会社である同工業団地の運営会社と日本の金融機関などとの共同出資により設立したが、「輸出加工区」とベトナム国内での販売が輸出扱いきれない「工業団地」の両方に認定されるといった特典も受けている。しかも敷地は広大で、すでに第2期工事にも着手している。

■97年にベトナムに進出し工場運営で実績

このレンタル工場のモデルになったのが、同じホーチミン市内のタン・トゥアン輸出加工区にあるユニカ・ピーバンで、もともとはユニカが1997年に同加工区に日本の3社と合弁でピーバン・インダストリアルを設立し、ユニカを含めた4社が



NPO法人アジア起業家村推進機構(川崎市)のミッションを案内するユニカ・ベトナムの木村氏(今年3月)。筆者(松浦)も随員として参加し撮影。同NPOはホーチミン市に隣接するバリア・ブンタウ省の日本企業誘致を支援

工場を区分所有する方式で創業。10年ほどして、他の3社が独立したことから、ユニカが同工場をマネジメント機能付きのレンタル工場に転換するとともに、社名をユニカ・ピーバンに変更。現在も日本企業10社が入居するなど満杯の状態が続いている。

一方、レンタル工場への転換と並行して、同加工区内にドリルとホールソーを生産するユニカ・ベトナムを設立。同社も3交代・24時間体制でフル稼働し、製品を日本や欧米、アジアに輸出するとともにベトナム国内にも販売している。

■「将来に向かって手を打つのが商売だ」

しかもユニカは、ホーチミン市に進出する2年前の95年に中国・北京市の近郊に廊坊日質機械工具有限公司(現・UNIKA機械工具有限公司)を設立し、ホールソーとアンカーの生産に乗り出すなど、「チャイナ・プラス・ワン」を90年代半ばに実践している。まさに時代の先取りで、安見社長は「将来に向かって手を打つのが商売だ」と強調する。

安見社長はアルバイトをしながら大学を卒業し、2年間の会社勤務を経て独立したが、「勤めていた会社の社長が退職金を弾んでくれたので、それを元手に起業した」と振り返る。創業したのは65年11月、28歳になった時で、「これからビルがどんどん建ち、道路、橋などのインフラが整備される。この分野で、あまりお金をかけないでできる事業を」と考え、ドリルやホールソーに着目したという。

当初は仕入れて販売していたが、知り合いにドリルに詳しい人がいたことから、製造方法を学ぶとともに、横浜市に小規模な工場を設けて71年にコンクリートドリルの生産を開始。その後、群馬県や岩手県に工場を建設して、石膏ボード、レンガ、FRP(繊維強化プラスチック)などの建築材に穴をあけるコアドリルや鉄をはじめとする金属板に穴をあけるホールソー、あけた穴に打ち込むアンカーなどにも生産品目を拡大させている。

■現場のニーズを基に何千種類の製品を開発

ドリルやホールソーなどの電動先端工具は、刃先に超硬合金やダイヤモンド砥粒を溶着させ、本体を電動機に取り付けて振動や回転させることで穴をあける。当然、作業性能の高さが求められるが、同社は北海道から福岡まで全国6地域に営業所を設け、「営業マンが現場に行って顧客のニーズを把握し、それをもとに研究開発する」のを基本にしている。



岩手工場(奥州市)は群馬工場(現在は物流センター)の生産部門を統合し、自動化により、強い国際競争力を発揮している



ユニカ・ベトナムの工場。機械と手作業の両方を駆使し、世界に製品を供給する。「一生懸命とは先ず現場に居て働くこと」といった日本語とベトナム語の標語が掲げられている



主力製品の1つ、コアドリル。ホームセンターでの売れ行きも好調だという



ピーバン・テクノパークのレンタル工場(奥)。手前は管理棟

穴あけに伴って出る粉塵を吸引するシステムや替え刃(ボディ)をワンタッチで着脱できる機構などは、こうして開発された製品だが、穴あけの対象となる建築材の材質、あける穴の大きさなどに合わせた製品が必要であることから、製造するドリルやホールソーなどは何千種類にも上る。こうした多品種の製品をホームセンターや問屋を通して、「お客さんにすぐに届くようにする」(安見社長)ことで売り上げを伸ばしている。

■縁を大切に、欧米やアフリカにも事業拡大

同社は11年に純粋持株会社制を導入し、グループ企業の機動的な活動と経営幹部をはじめとする人材の育成に力を入れるとともに、13年にはユニカ・アセアン・トレーディング(ホーチミン市)とユニカ・インド(バンガロール市)を設立し、ASEAN(東南アジア諸国連合)やインド、中東での販売を強化。さらに「ユニカ・ベトナムの新工場を建設し、欧米やアフリカにも販売拠点を開設したい」と安見社長は青写真を描く。

ピーバン・テクノパークの藁谷氏は商社やメーカーに勤め、ベトナムでの経験が豊富。またユニカ・ベトナムの木村仁次郎(Tong Giam Doc)ジェネラルディレクターは79年、21歳の時にベトナム(越)からポートピープルとして大阪に着き、群馬大学、同大学院で機械工学を専攻してNECに入社。「36歳の時に安見社長と出会い、日越のために働こうと決心した」とテンボ良く日本語で話す。

中国・UNIKA機械工具の総経理・布占民(BU ZHANMIN)氏も日本企業で技術者として働いた経験があり、安見社長は、こうした人材と「縁があって知り合った」と語る。ベトナムの現地法人の社名に



付いているピーバンはVietnamとJapanの合成語。そこに国際的な事業に取り組む安見社長の基本的な姿勢があるようだ。

資料請求番号 0002

安見 義矩《やすみ・よしのり》

1937年11月長崎県生まれ。中央大学法学部卒。2年間の会社勤務を経て、65年11月ユニカ設立。2007年には高齢者にデイサービスを提供するユニケアネットサービス(群馬県大泉町)も設立。77歳。

【会社プロフィール】

- 社名=ユニカホールディングス株式会社
- 本社=東京都千代田区岩本町2-10-6 川原ビル ☎03-3864-8722
- 創業=1965年11月22日
- 従業員=150人(事業会社のユニカを含む。海外法人の6社も合わせると600人超)